

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 17 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500734

研究課題名（和文） 戦後の家庭用電化製品と食卓の使用実態と変遷に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Actual Usage and Transitions of Household Appliances and Dining Table after the Second world war in Japan

研究代表者

石村 真一（ISHIMURA SHINNICHI）

九州大学・芸術工学研究院・教授

研究者番号：20294994

研究成果の概要（和文）：戦後の映画 930 本を対象とし、家庭用電化製品である電気炊飯器、電気洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ、食卓を事例に生活の変化について考察した。その結果、家電製品の普及する 1950 年代は、食卓も含め、伝統的な床坐による生活が未だ定着している。1960 年代になると椅子坐の生活様式が増加する傾向を示す。しかしながら、1980 年代後半から、洋室床坐という新たな生活様式が出現し、若い世代に普及する。

研究成果の概要（英文）：Based on 930 titles of movie after the Second World War, household appliances like electronic rice cooker, electrical washing machine, electrical refrigerator, television, dining table were used as an example to investigate the transitions of lifestyle. From the study, during the 1950s where household appliances were popular, the traditional floor sitting lifestyle had not been changed. It could be seen that there was an increased in the chair sitting lifestyle in the 1960s. But since the late 1980s, the flooring sitting lifestyle in the western styled room appeared to gain popularity among the younger generation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：デザイン史

科研費の分科・細目：生活科学

キーワード：家庭用電化製品・食卓・映画・台所・ダイニングルーム・居間・起居様式・DVD

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1980 年代後半より、VHS による映画のビデオが販売され、2005 年あたりまで販売された。1990 年代後半より DVD による映画が販売され、現在も引き続き販売されている。またパソコンと記録媒体の性能も急速に高まり、2005 年あたりから、パソコンで DVD の映画を鑑賞することが可能となった。

(2) ところが、映画は一次資料でないことから、資料的価値が低いと考える人も多く、これまで生活文化研究の対象とはされていなかった。それでは我々の生活に関する一次資料が系統的に存在するかと言えば、必ずしも揃っていない。例えば、雑誌であるが、撮影する対象は、あらかじめ設定しており、いわば作られた生活場面が頗る多い。また、写真資料においては、ハレの場面を撮影したも

のが圧倒的に多く、日常の生活場面を撮影したものは極めて少数である。

(3) 映画の現代劇は、製作時の生活をリアルに反映されている作品も多く、仮にセットで撮影しても、当時の地域における生活を極めて精緻に表現している。このように映画は生活文化の研究には格好の素材といえる。

## 2. 研究の目的

(1) 戦後日本における生活文化の変遷を、戦後に製作された映画を史料として位置づけ、家庭電化製品と、食卓を研究の対象とし、10年を一つのスパンとして解析して、その軌跡を明らかにする。

(2) これまで支持されてきた欧米を手本とした洋室の椅子坐文化と、伝統的な和室の伝統的な床坐文化が折衷しているといった戦後の起居様式に関する考え方を、根本から考え直す。

## 3. 研究の方法

(1) 戦後に製作された映画の中で、現代劇というジャンルだけを対象とする。1945年から10年間を一つの単位とし、キネマ旬報年間ランキングを参考にしながら、1年間の映画の本数を10本以上という条件で調査する(1945年、1946年は作品が少ないので例外とする)。

(2) その後、調査結果を家電と起居様式から分類し、7つのグループを比較し、その変遷を明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) 戦後の起居様式は、一定の速度で床坐から床座・椅子坐併用に向かうのではなく、1950年から1960年あたりまでは非常ゆっくりとした動きを示す。その代表的な映画監督が小津安二郎であり、知識層の家庭で展開する日常の出来事を精緻に綴り、日本人の伝統的な精神と欧米の新たな精神の融合を上手に表現している。『晩春』『麦秋』はその典型的な作品で、椅子坐も数多く登場する。小津の和洋折衷は一定の様式で示されているとは限らない。1950年に公開された『宗方姉妹』では、ウインザーチェアを多用するなど、実験的な試みもなされていく。小津の主張する起居様式と家具が完全に廃れたわけではない。富裕層の中には、類似する継承性が認められる。

(2) 1965年から1980年代前半までは、急速に和洋折衷の生活様式が展開する。1950年代後半に全国で展開する2DKの公団住宅は若い世代に夢を与え、日活の青春映画に代表されるような、高度経済成長前半期の若い夫婦を主体とする生活を形成していく。公団住宅では、ダイニングセットで食事をするといった椅子坐の生活が広く受け入れられた。

ところが2DKの間取りは、1970年代になると人気がなくなり、子供のいる家庭では、3DKに人気が移っていく。そして高度経済成長が終わる1970年代の半ばになると、都市部ではマンションに人気が集中し、LDKの間取りが好まれるようになる。この間取りの特徴は、広いリビングルームである。当初は椅子坐が主流であったが、1980年代になると、一部の家庭はフローリングの部屋で家具調こたつを使用するといった「洋室床坐」が見られるようになる。食卓も、ダイニングテーブルと家具調こたつが併用され、椅子坐と床坐で食事をするようになる。お客さんが来たらこたつで焼き、毎朝の朝食はダイニングセットでとるといった生活が、都市社会のスタンダードとなる。そして大学紛争やデモを通して、若者の生活観が大きく変わり、家族団らんといった食卓が衰退していく。すなわち、長年日本で継承されてきた大家族制度が崩壊していった。1970年代から1980年代初頭は、原田芳雄主演の映画に見られるようなハードボイルドな人生観と山田洋次が監督する人情的な生活観が対峙することになる。東京のような大都市では、下町の人情に対して、高層マンションは他人と付き合う煩わしさのない生活として表現されることが多い。

(3) 1980年代半ばになると、大学生を中心に下宿離れが進み、畳の部屋が若者に嫌われるようになる。いわゆるフローリングのワンルームマンションの人気が一気に高まり、地方都市でも同様の傾向を示す。このワンルームは殆どが3坪であり、ベッドを置けば家具類は少数しか使えない。その結果、フローリングの上にカーペットのような敷物を使い、その上に電気こたつ又はローテーブルを置くという床坐の生活が増加する。子供のいる家庭でも床坐の生活が少しずつ増える傾向にあり、1980年代後半からは床坐回帰も加わって、椅子坐の進展が少し鈍る。1987年に公開された『マルサの女』では、家族が洋室床坐でテレビゲームを行う場面がある。新たな床坐文化が日本で誕生したのだが、新しいという意識で生活しているわけではない。1988年から続いている『釣りバカ日誌』シリーズは、2作目から洋室床坐が登場し、その後の作品では大概座面の低いソファが置かれている。つまり、一つの部屋の中で、椅子坐と床坐を使い分けているのである。ソファは、椅子坐というより、寝ころぶような目的もあり、人によってはベッドの代用としている。畳の使用は減ったが、ソファはまさに床坐と椅子坐の折衷的な家具として現在も人気がある。

(4) 戦後の映画を通して、日本人の起居様式を概観したが、文献史料では1950年あたりから、日本人による新たな和洋折衷の起居

様式が提案されている。その一人が建築家の坂倉準三である。低座の椅子はその象徴的なもので、その後家具設計家の豊口克平も、胡座のかける大きな低座の椅子を設計している。こうした主張は、1950年から1960年にかけて、日本の建築界やインテリアデザイン界に大きなうねりをなしていた。家具設計家の剣持勇は、新しい日本人の美意識をジャパニーズ・モダンと称して、一つの運動を試みた。籐の椅子も、ジャパニーズ・モダンの具現化として提示された。籐の椅子は映画の中でも度々使われる。旅館の入り側、個人住宅の廊下、居間の中でも使用される。黒澤明が監督し、1952年に公開された『生きる』では、2階の和室に置かれ、食事に使用している。籐は東南アジアが原産で、正倉院にも椅子が収蔵されているが、庶民が椅子に使用するようになるのは早くとも大正期あたりからである。戦前期には富裕層で普及しており、戦後は中流の家庭でも盛んに使用されている。籐椅子は、和室でも使用されることから、早い時期から和洋折衷の生活に貢献した。剣持が籐椅子に興味を持ったのは、デンマークの家具に籐椅子があったことから、スカンジナビア・モダンの影響を受けたのである。つまり、籐という素材は中国、インド、ベトナム、日本といったアジア諸国と、ヨーロッパのデザインに深く関与している。日本らしさの演出は、こうしたグローバルな素材を用いているのである。戦後の映画を通して、近世の日本文化から踏襲してきた畳の上での正座といった文化観は敬遠され、リラックスができる起居様式をひたすら追いかけているのが戦後の日本文化であるように感じる。生活における美意識は、現代が必ずしも高くはなく、1954年に公開された『山の音』は、原作者である川端康成の自邸で撮影され、北鎌倉の持つ生活を精緻に表現している。この北鎌倉は小津作品にも度々登場しており、日本の住宅地のモデルケースとして広く紹介された。

(5) 主たる家電製品の普及率については、内閣府が1950年代から調査しており、特に研究しなければならない必然性はない。ところが、生活での使用実態については、明確な記録が残されていない。本研究では、この使用実態に着目して、扇風機、電気炊飯器、電気洗濯機、電気冷蔵庫、電気掃除機、テレビについて調査を行った。

(6) 電気扇風機は、戦前期に富裕層に普及し、貸し扇風機も既にあった。いわば戦前期の電機扇風機はステータスシンボルであった。また色は黒で、海外の扇風機のコピーをしていた。戦後の映画では1947年の『野良犬』にカラー扇風機が認められる。おそらく三菱製のものと推察される。電機扇風機のカラー化は、電話に比較して早く、1955年まで

の家電製品では、最もカラー化が進んだ。それでも1953年に公開された『東京物語』では黒の電機扇風機が使用されている。1955年以降は、映画の中では黒の電機扇風機は殆ど見ない。1957年に三洋電機が高さを調節できる電機扇風機を発売して以来、アメリカで使用される椅子坐用のタイプが日本でも徐々に普及していく。エアコンの普及で一時減少したが、2000年以降の映画でも電機扇風機は使用されている。エアコンに慣れると体に悪い影響が出るという説もあり、電機扇風機は今後も使用率は減っても、なくなることはなさそうである。

(7) 電機炊飯器は1955年に東芝から発売され、数年間で日本の家電各社も追従した製品を販売する。電機炊飯器に限らず、家電製品は内閣府の統計で示された普及率より少し遅れて表現されている。電気炊飯器は1960年代前半に全国で普及したことから、最も普及速度が早く、食生活を象徴する道具となった。1960年代までは、おひつが併用されていた。つまり、台所で炊飯した後、ご飯をおひつに移して食卓の近くに持って行って使用した。確かに手間はかかるのだが、おひつは水分を適度に吸うのでご飯は美味しい。電化製品は、必ずしも味覚の上では進歩していないのである。1970年以降はジャーの機能が付加されて、おひつが衰退する。1990年代後半から、角状の形態に移行し、多機能化する。そして映画の台所場面の象徴的な道具という1960年代に見られた印象が薄れていく。

(8) 電機洗濯機の開発は戦前からあったが、実際に普及するのは1955年あたりからである。洗濯自体の場面は、盥に洗濯板といった道具を使用して1950年代まで見られたが、1950年代後半に著しい普及が見られる。当初は置き場所が住宅の外と中の両方が認められたが、1970年代以降は殆どが建物の中に置かれている。インテリア的な要素がないためか、映画での使用シーンは意外に少ない。

(8) 電気冷蔵庫は、電機洗濯機同様、戦前から国産のものが存在した。1950年代前半には富裕層がアメリカ製のものを使用していた。映画の中でも、こうした大型冷蔵庫が使用されている。1960年代後半になると、国産のものが普及し、映画の中にも登場する。その後、1980年代から大型化が進行する。つまり、アメリカに比較して大型化は30年遅れていることになる。電気冷蔵庫も他の家電と同じようにカラー化、メタリック家が進み、インテリアとの関連性が強い。

(9) テレビは当初アメリカと同じ17インチで開発される予定であったが、種々の事情で安価な14インチという小型のもので開発され、1950年代前半に販売された。1950年代後半に爆発的な人気がおこり、普及率が高まる。1965年あたりから家具調のものが広く普

及する。家具調の大型化は、テレビ台の誕生にも繋がっており、液晶テレビの現在もその影響が認められる。家具調テレビは、和家具のイメージを共有しており、日本のデザイン史でも特筆される。家電製品を戦後の映画で見る限り、生活のステータスシンボルとして登場することが多く、特に台所、居間といった空間での使用が中心になっている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 諏訪部 真、石村真一、映画に見る戦後日本の籐椅子、芸術工学研究、Vol. 13、査読有、2010、pp. 31-45
- ② 石村真一、日本におけるカンチレバー構造の椅子に関する研究－(4)、芸術工学研究、Vol. 12、査読有、2010、pp. 35-48
- ③ 増成和敏、石村真一、テレビ受像機の普及期における「嗟峨」の誕生とシリーズ展開、デザイン学研究、通巻 194、査読有、2009、pp. 33-42
- ④ 石村真一・林原泰子、映画に見る戦後日本の床坐と椅子坐の変遷－1、芸術工学研究、Vol. 11、査読有、2009、pp. 37-69

[学会発表] (計4件)

- ① 石村真一、1957年に上映された映画『米』に見る生活－茨城県の伝統的な農村生活が継承されていた時代－、日本生活学会第38回研究発表大会、2011.05.15、早稲田大学
- ② 石村真一、戦後に見られるカンチレバーの椅子－1945～1951に公開された映画の使用場面を通して－、日本生活学会第37回研究発表大会、2010.05.09、武庫川女子大学
- ③ 石村真一、戦後の映画に見る「洋室床坐」の展開と家具の関連性、日本デザイン学会第57回研究発表大会、2010.07.03、長野大学
- ④ Cookson Andrew Jonathan, Ishimura Shimichi, The Early Development of the English Rattan Seat, THE 56<sup>TH</sup> ANNUAL CONFERENCE OF JSSD 2009.06.27、名古屋市立大学

[図書] (計1件)

- ① 石村真一、角川学芸出版、カンチレバーの椅子物語、2010、pp. 1-271

[その他]

ホームページ等

<http://hyoka.of.kyushu-u.ac.jp/search/organization/03/30900/index.html>

#### 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
石村 真一 (ISHIMURA SHINICHI)  
研究者番号：20294994
- (2) 研究分担者  
林原 泰子 (HAYASHI BARA YASUKO)  
研究者番号：40532362
- (3) 連携研究者  
なし ( )  
研究者番号：